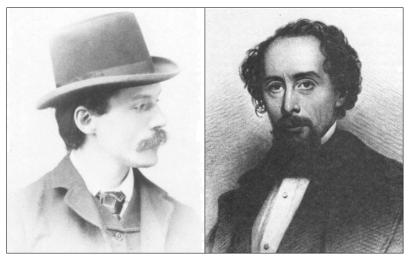
### 第九章 影 響 ——白鳥は悲しからずや——

金山 亮太



(右) 46歳当時のディケンズ (シャルル・ボーニェによる素描からの版画、1858年)

(左) 30歳当時のギッシング (1888年8月22日撮影)

クトリア朝が英国史上最も隆盛を極めた時代であったこ

この時代の栄華は早々に頂点に達していたとする見解を採るな ことを最初に確認しておきたい。 りとその輝きを失っていくように、ギッシングの少年時代は、 前に姿を現す機会を減じていく。まるで欠け始めた月がゆっく バート公に先立たれた女王は、これ以降公式行事を含め人々の は下り坂になっていたことになる。確かに、その四年後にアル らば、ギッシングが誕生した一八五七年には、既に時代の趨勢 ド・パークを会場として開催された第一回万国博覧会において どこまでが隆盛でどこからが衰退なのか。一八五一年にハイ 年に没するまで、優に六十五年にわたって閲したこの時代の、 とは明らかであるが、 八三七年に弱冠十八歳で即位したヴィクトリア女王が一九〇一 クトリア朝の栄光が翳りを見せていく過程と重なっていた いつからが後期になるのであろうか。

的、

考えれば、 焦燥に駆られ、わずかな歓喜や挫折に身をよじるものだ。こう 長期」であり、いわば「青春時代」だったのである。 も精神的にも大きな変化が生じるこの時期には、誰もが不安や ないかとさえ思えるほど、この国には大きな転換期が訪れてい 人々が存在した。いや、むしろ、誰もが迷いの中にいたのでは この時代の繁栄の裏には、急激な社会の変化に戸惑う多くの 十九世紀とは、イギリスという国に訪れた何度目かの 安定と成熟を受け入れるべき「不惑」の頃に当たっ 「後期」ヴィクトリア朝とはすなわち青春の終わり 身体的に 成

に、

ギッシングはどのような影響を同時代の作家や思想から受けて V ていたと言えよう。 たのであろうか では、このような時代の壮年期に成長した

に執筆した『チャールズ・ディケンズ論』(一八九八年) 代だった」。ルイ・カザミアンが「社会小説」と命名したこと ことに危機感を募らせた文人たちが、それまでの時代以上に、 ほぼ一貫して見られるものである。 という大真面目な義務感であり、これはギッシングの作品 なく、文学者もまた社会改良のために何かを為さねばならない 読者を「教化しつつ楽しませる」などといった優雅な姿勢では ンソンが『アイドラー』(一七五八~六〇年)で実践したような、 とが作家の使命とされた。それは十八世紀のサミュエル・ジョ 社会の公器として用いることによって、 年」という年代制限を設けたことからも明らかなように、ヴィ いたかどうかである。本章では彼が一八九七年にシエナ滞在中 メッセージ性を伴う文学が、本当にギッシングの資質に合 で市民権を得たこのような文学の様態、すなわち、文学作品を 同時代の情景に注意を払い、彼らの分析を通して何らかの政治 クトリア女王即位前夜からディケンズの死までの四十年間 「教会や貴族階級に伝統的に備わっていた権威が揺らぎ始めた ウォルター・ホートンがその著書の副題に「一八三○~七○ 彼が先輩作家として最も影響を受けたディケンズとの比較 宗教的、道徳的哲学を採用するように人々に働きかけた時 問題は、こういった社会的 同時代人を教化するこ を頼り こって

についても検討していきたい。 にそれらを受容し、 のように生き惑う彼の姿が、誰に影響を与えることになるのか 次いで同時代の他の作家の影響を考察する。 どのような混乱を抱え込んだか、 彼がい そしてそ

### 第 節 ディケンズへの片思い

0 と共に一八四〇年代の幕が開いたことを考えると、この四 法や不況という形で顕著に現れ始めた時期であり、 き始めた一八八〇年代は大英帝国の斜陽が新アイルランド に想像できよう。 の吸っていた空気がいかに異なっていたものであったかは容易 知れば、 年に彼の出世作『ピクウィック・クラブ』が出版されたことを 挙法改正が施行され、 で似ているように見える。 ランド大飢饉などで揺れた一八四○年代とは世情不安という点 スト運動に典型的に見られるような労働争議、 く体現した作家であるように捉えられてきたのは、 間に人々の社会に対する意識がかなり変わっていたであろう クトリア朝の発展と彼の作家としての経歴が同 八一二年に生まれたディケンズが成人する前年に第一 たことによるものである。ギッシングが小説を本格的に書 同じヴィクトリア朝の作家とは言いながら、 ディケンズが良くも悪くもこの時代を最もよ 一八三七年という女王即位の記念すべき しかし、女王とアルバート公の結婚 あるいはアイル チャー 歩調を取 一つにはヴ この二人 ・ティ -土地 回 5 選

ŋ

ことは明らかである。 グの作家としての出発点は、

か

当時、 稿であった。ここで見逃してはならないことは、 に手がけた短篇小説であった。ジャーナリストとして新聞記 に流れていったアメリカで、 いる女性との生活を実現するためにまとまった金銭が必要であ から文学者たらんとしたわけではなく、いずれも好意を抱いて り込ませた(図①)のも、後にデビュー作となる短篇小説の原 を書く傍ら創作にも手を染めたディケンズが一八三三年の秋に 『マンスリー・マガジン』誌の原稿受付ポストにこっそりと滑 もちろん、この二人に共通点がないわけではない。 そのために選んだのが文筆業だったという点である。 ペンで身を立てるというのは決して選ばれた者にのみ 糊口をしのぐために一八七七年頃 オーエンズ・カレッジを退学の後 二人とも最 ギッシン



初めての作品を投稿する21歳の 図(1) ディケンズ (1833年秋)

能なことではなく、むしろ頭の良い若者ならば一度は考えても

よい 批評誌や雑誌の創刊が相次ぎ、 流 書き手を求めていたのであり、 読み手の格差が縮まっていた。 量かつ新種の読者層が誕生しており、そこでは文章の書き手と 行された初等教育法の恩恵を受けた、 創刊の読者投稿雑誌『ティット・ビッツ』のパロディであるこ とからも明らかなように、十九世紀の末期には一八七○年に施 九一年)の中で言及した『雑』 れに乗ってペンに賭けたのである。 ・選択肢の一つであった。 談』誌のアイデアが一八八一年 ギッシングが『三文文士』(一八 いわばこの二人は各自の時代の 新しい読者層を惹きつけられる 一方、ディケンズの青年期にも 一般大衆を中心とした大

模倣すべきものであると主張する人物 代の文筆家は、 時代の名残がここには見て取れるが、 ろう。まだ文学というものが尊敬すべき教養のひとつであった が作者ギャスケル夫人によって揶揄的に描かれていることであ ク・クラブ』の文体は低俗であり、ジョンソン博士の文章こそ た『クランフォード』(一八五一年)の第一章で、『ピクウィッ んとするような者の居場所はなかった。芸術至上主義、 あったことをもこの一節は示している。 石のような」意見に耳を貸す者はもはや急速にいなくなりつつ ここで思い出されるのは、ちょうど世紀の折り返しの年に出 [三文文士] もはや売文業であることを自ら認めた方がむし の中に描かれる、 実際にはそういった「化 一方、ギッシングの時 (ミス・ジェンキンズ) 真摯な芸術家たら 芸術の

つ、

ことを誰よりも知っていたのは作者その人であった。 うが、一般読者がそのような芸術性など文学には求めていない る階層の人々だけが口にできる「たわごと」であることを、 い部分がギッシングには最後まであったのである。 わらず、読者に自分と同じ知的レベルを期待せずには イリー氏』という作品を完成させることで芸術的達成感を味わ ド・ビッフェンは、長年にわたり彫啄を加えてきた ッシングは心得ていた。この作品中、 ための芸術などというようなフレーズは、 現実主義者の作家ハロ 経済的にゆとりの 『乾物屋 にもかか いら n ル ギ あ

らうことが肝心なのであって、 らわなかったし、そもそも念入りに作品構成を練るということ 的であったとしても、彼らを退屈させたり反発を覚えさせたり 思えるほどである。彼のデビュー作である『ボズのスケッチ集 自体、その頃のディケンズの発想にはなかったのではないかと 時として読者の好みに合わせてプロットを変更することをため 供することを念頭に置いて初期の作品を発表した。そのために、 ってこその作家、という信念であり、まず読者に手にとっても せるうちにディケンズの中に確信として芽生えたのは、 ないように、バラエティ・ショーさながらに様々な語りを聞か した「お品書き」であって、彼らの好みの内容や文体を探りつ (一八三三~三六年) などは、さしずめ彼が同時代の読者に提示 一方で題材の調理の腕を磨く場であった。 方、ディケンズはまず何よりも読者が求めているものを提 たとえそれが読者を教化する目 読者を飽きさせ 読

び込んでいけるとディケンズは信じていたのであって、 彼らと同じ価値観を共有することによって初めて彼らの懐に飛 読者に寄り添ってはいないのではないかという恐怖であった。 ルド・ワーズ』誌や『オール・ザ・イヤー・ラウンド』誌にお の哲学は後に彼自身が編集・発行することになる『ハウスホー 少という形で突きつけられる読者からの「ノー」であった。 せるのは親友による忠告か、あるいは月刊分冊の販売部数の減 スタイルに揺らぎを生じさせなかった。彼の執筆方針を変えさ 批 することは禁物であることを肝に銘じていたに違いない。 の方から読者の側に降りていくというのが彼のスタンスであっ つまり、あくまでも読者との双方向的意思伝達は可能であり、 ったのは金銭的損失だけではなく、自分が独りよがりに陥って、 いても一貫していた。ディケンズが雑誌の売り上げの低下を懸 記評家に酷評されてもディケンズは 執筆者や編集者に檄を飛ばすとき、 (内心はどうあれ) 彼の不安の根底にあ 常に彼 自 仮に 分の

> 批評家たちに対してギッシングは次のように述べる 家たちを支持し、ディケンズのいい加減さを非難する同時代の る。『チャールズ・ディケンズ論』で、 ヨーロッパの 高尚な作

くれることは間違いなかったからである。 てためらうことがなかった。なぜなら、善良な大衆が賛同して りや社会の不正と戦うためには、 全であればあるほど、 かろうか。 を喜ばせることこそ、小説執筆の第一にして最高の鉄則ではな っては一種の冗談としか思えなかった。できるだけ多くの人々 ともかく、大多数に反逆するような小説を書くなんて、彼にと に感ずることこそが、 読者を怒らせる自由など望んではいなかった。 ィケンズはそのような芸術的理念を目指してはいなかっ 彼は自作を高く評価した。 彼にとっての生命だった。この共感が完 彼は芸術の力の限りを発揮し 同国民の少数者なら ……政治の誤 読者と一

家のように書くことができなかったのかであろう。 この文章を読みつつ、われわれが考えてしまうのは、 経済的な要求に迫られて短篇小説を書きなぐらなければならな ディケンズの偉大さの本質を知っていた彼が、なぜこの先輩作 状況であったために、この先輩作家の世俗性の真価を認める 『チャールズ・ディケンズ論』 を執筆した頃のギッシングが ここまで

近感を抱く一方、

ことができるようになったのだ、という意地悪な見方も可能で

のように評することで彼を超えようとする。ングの分身の一人であるビッフェンはディケンズのことを以下あるが、ことはもう少し複雑である。『三文文士』で、ギッシ

し、彼自身の気質のせいもあって、それを手がけてはいない」ことを知っていたけれど、彼はすぐにメロドラマにしてしまうと思っているんだ。ディケンズはそういう作品も可能だというの暮らしを描くと同時に、本来非英雄的な人間の姿を描きたい「僕はくだらない境遇に翻弄されている大多数の人間の日々

(第十章)

ばせつつ、社会的メッセージを含む作品で彼らを教化するなど ためであり、 創作とは、 ングの願望ではなかったかと考えられる。すなわち彼にとって ができたならば、たとえその作品の売れ行きが芳しいものでな 的 くような作品を書きたいと口にする。これはギッシングの文学 自分は対象を過不足なく描写することで、そのものの本質を描 このあとビッフェンは、たとえそれが退屈なものになろうとも、 誠実性、 !理想の一端を表してもいよう。彼がこの貧乏作家に代弁させ 清貧に甘んじる覚悟を抱けるようになることがギッシ すなわち自分なりに納得できる作品を書き上げること 芸術作品としての完成度の高さといった自己満足の 金のために手を染めたとは言え、あくまでもテーマ ディケンズのように売り上げを確保して読者を喜

わっていそうである。次節ではその違いについて考察してみたの違いだけでは片づけられない、この二人の小説家の違いが関諦念を抱いていたのである。ここには、単に作家としての資質といった離れ業をやってのけることは自分にはできないという

# 第二節 影法師に怯えて

61

ずだ、という彼の確信がここには潜んでいることを見落として 学者というものに対して執拗なほど敵対的、 ずなのに、と嘆いてみせる。ディケンズが自作の中で西洋古典 うな境遇に追い込んだ両親を心から許したことはなかったし、 はならない。ディケンズは痩せても枯れても、骨の髄まで中流 させてもらえたような教育の機会が自分には保証されていたは あるのは、高等教育への「酸っぱい葡萄」であると言えよう。 十分な教育を受けるのにふさわしい知性を自分は持っていたは 獲得した。いわば、「怪我の功名」とも言うべき運命の巡り合 者監獄に入った父親に代わって借金の返済をするために、 しかし、経済的余裕さえあれば、当時の中流階級の子弟が受け わせが小説家ディケンズを生んだのである。彼は自分をこのよ 通して、ディケンズは社会を「下から眺める」視点を図らずも 者階級の子供たちに混じって靴墨工場で半年働くという経験を 経済観念の乏しい父親のツケを払わされる格好となり、 あるいは冷笑的で

階 級 の人間だったのである。

として、 を、 学に親しみ、ゆくゆくは古典学者になろうと考えていたことか をするのが常だった。つまり、ディケンズが身内の過失をむし ある恋人のために盗みを働き、全ては たのであった。その一方で、常に優等生でなければならないと しか自分の特権を享受できないことを十分知っていたのであ は持たなかった。 て居場所を失い、そしてその汚点を直視できないために更に失 ろ梃子にして這い上がったのに対し、 人並みの幸福に安住する資格などないのだと思っているかのよ いうストレスに由来するものかどうかは分からないが、 らして、 を続けることができ、奨学金を得てオーエンズ・カレッジで文 の上塗りをしてしまうのであった。 自らの血のにじむような努力によって現実のものとしてき [語にも精通するという知識人として理想化された自画像 西洋古典を読みつつ、同時代の思想や科学にも目を配り、 方 ギッシングは自分を不幸へ追い込むような自虐的な選択 自分の将来を台無しにしたのである。まるで自分には ディケンズのような屈折した形での高等教育への憧れ ギッシングは父親を十三歳の時に亡くしたものの学業 むしろ彼は優秀な成績を収めることによって 彼は自らの才覚を過信し 「身から出た錆」 娼婦で の代償

<u>ئ</u>

理解者のような振る舞いをすることができたのである。(8) 失うことがなかったために、自らの立ち位置が揺らぐことがな 写する対象に肉薄していたことを意味するものではない。 ングにはそのようなことをする要領の良さ 何の迷いもなく人物造型をし、その巧みさの故に時には庶民の ばない。ただし、これはディケンズの方がギッシングよりも描 とす者であれ、いずれも複雑さを内包しており、 ギッシングは自然主義的な「あるがまま」の人物を描写しよう の人物の特徴を誇張しているから印象に残りやすいのに対 かつかみ所の無さ、正体不明なところが残るのである。 た知的な距離が保たれている。 と冷徹な計算を施して登場人物を描写した。そこには断固とし かった。したがって、対象と自分との間にきちんと一線を引き、 ケンズは所属する階級の一員であるというアイデンティティを が悲惨な生涯を送る者であれ、 存在感を示すのに対し、ギッシングの描く人物は、 方である。ディケンズの描く登場人物が、 しては、 はなかった。彼は常に対象を緻密に観察し、 彼とディケンズとを隔てるのは、 ディケンズが「カリカチュア」 にもかかわらず、 夢破れて零落の暮らしに身を落 対象に対する距離 の技法を使って個 脇役も含めて強烈な (偽善性とも言えよ 彼らにはどこ 観念的な処理 明快な像を結 たとえそれ これに ギッシ 0) ディ 取 ŋ

定めていたために必然的に観察することを余儀なくされたスラ

経済的に困窮していた彼が生活の場をそこに

ギッシングは、

街を舞台とした小説を書き、

様々な社会悪を告発した。

しか

張が出てくるであろう。

しかし、

ギッシング自身、

ディケンズ

としたからこそ、

曖昧な部分が残って然るべきなのだという主

対

の描く登場人物がカリカチュアであるという批判に対して

また、

ギッシングはその登場人物の中に自らを投影すること

る。 ヤールズ・ディケンズ論』第六章で反論を試みているのであ

うかである。

が多く、 は、 ころが、ギッシングの描く人物には、まるで背後霊のように作 者の姿が透けて見えてしまうのである。この差を考える際の鍵 品を読んでいるときに幼い作者の姿がちらつくことはない。と がなく、読者はディケンズの過去を知ったとしても、 かかわらず、登場人物に対する彼の距離の取り方には「揺らぎ」 などの「自伝的」と言われる諸作において、彼自身の体験を交 ルド』(一八四九~五〇年)、『大いなる遺産』(一八六〇~六一年) ゥイスト』(一八三七~三九年)や『デイヴィット・コパフィー 由来するのである。たとえば、ディケンズが『オリヴァー・ト を知ってしまうと、ますます混乱が生じる。実はわれわれがギ 者には登場人物の全体像が飲み込めなくなる。彼の伝記的事実 物の人体が使われているような生々しさだけが印象に残り、 物に現実味が増すわけではない。むしろ、木偶人形の一部に本 人物に自分自身の断片を、また女性の登場人物には彼の身近に ッシングの小説を読むときに時として感じる歯がゆさはここに いた女性の断片を埋め込むことがある。しかし、それで登場人 ないか、という議論もあろう。確かにギッシングは男性の登場 時には自分自身を投影していることは明らかである。 ギッシングに自分の所属する階級への帰属感があったかど 彼が対象との間に一線を引いているというのは矛盾し 実際に作 読

東剤師をしていた父を持つギッシングは、地方都市でこそインテリで通ってはいるものの、所詮父親の教養などたかが知れていたことに気づいていたように思われる。ここに、自分が本来所属している階級に対する彼の捩れた自意識を見て取ることができよう。これは彼自身が本物の高等教育を受けることに気がいていたように思われる。ここに、自分が本を教養人として完成させてくれるはずのものだったからである。ディケンズにもう少し教育があったなら、という仮定に対な。ディケンズにもう少し教育があったなら、という仮定に対な。ディケンズにもう少し教育があったなら、という仮定に対なる。ディケンズにもう少し教育があったなら、という仮定に対して彼は次のように述べている。

ではずだ。 (第二章)だはずだ。 (第二章)だはずだ。 (第二章)だはずだ。 (第二章)だはずだ。 (第二章)だはずだ。 (第二章)がある。ごく普通のものでいいから、もう少し教育があれて、彼ほど素晴らしい才能に恵まれている人間なら、その欠点ば、彼ほど素晴らしい才能に恵まれている人間なら、その欠点がある。ごく普通のものでいいから、もう少し教育があれて点がある。ごく普通のものでいいから、もう少し教育があれてはずだ。

でそれに磨きがかけられるはずだという主張なのだが、この発ここで展開されているのは、知性ある人間は教育を受けること

などと自称する彼の選民意識(そして、その裏返しとしての強 こそ教育を受けるにふさわしい人間であることを彼は疑わなか 約束してくれる、というナイーブな信念である。そして、 ないが、それを受け入れる器の持ち主には必ずや人格の向上を ン・ピークに典型的に見られるような、「自然が生んだ貴族」。 った。『流謫の地に生まれて』(一八九二年)の主人公ゴドウィ 教育とは劣った知性の持ち主には大した実りをもたらさ がここには露わになっている。 自分

言の中に教育に対するギッシングの絶大な信頼が窺える。

すな

物語』 すると大衆の側に近い存在なのではないかという懸念はギッシ この二人は似ているように見える。しかし、実は自分はもしか 魔をしているようにさえ見える。教育の力によって振り払うこ ドン大学への入学まで約束されていた彼が、 からである。優秀な成績を収め、数々の奨学金を手にし、 ない自分自身の努力によって証明するより他に方法がなかった ングの脳裏からは去らなかった。ディケンズが自分の「生まれ 怖を表し、ギッシングも無知蒙昧な大衆を毛嫌いしている点で むしろ彼の教育(そして、それによってもたらされた教養) 意識にここまで縛られなければならなかったのか。そこには、 (nature)」の良さに対する素朴な信頼を失わなかったのに対し ディケンズが 『バーナビー・ラッジ』(一八四一年) ギッシングは自分の「育ち (nurture)」の良さを、 (一八五九年) において、暴徒と化した群衆への嫌悪と恐 何故に自分の階級 や『三都 他でも が邪 ロン

> シングに与えた影響について見ていきたい。いずれもヴィクト ものの、その後の生き方が彼とは全く異なる二人の人物がギッ 込んだ汚点であるかのように思えたに違いない) リア朝において特異な位置を占め、 なかったにもかかわらず自らの努力で高等教育を得るに至った ような境遇、すなわち地方都市出身であり、かつ富裕階層では 然とした不安の元凶ともなったのである。次節では、 にぼんやりとした影法師のように彼につきまとい、かえって漠 とができたはずの階級的劣等感(彼にはそれはまるで身体にしみ て仰ぎ奉られ、実際には敬して遠ざけられる存在となった人物 時代の終わりには象徴とし は、 皮肉なこと 彼と同じ

## 第三節 哲人と隠者のはざまで

である。

になる。また、自ら世論を引っ張っていくか、 ことである。前者の場合、 み出し、その中心的存在になることで他の流れに巻き込まれな 動の時代を生き残る方法には二通りある。一つは自ら流れを生 状態が不安定になることは言を俟たない。 いようにすること、もう一つは世間の喧騒から離れて隠棲する 会に対応していくのは並大抵のことではなかった。こういう激 人にとっては、自分を見失うことなく、 つの時代の過渡期には様々な価値観が錯綜し、 強靭な精神力と体力が何よりも必要 かつ急速に変化する社 特にヴィ あるいは常に警 人々の クトリア朝 精神

!の句を発したり、世間の耳目を集めるような主張をすること

ご意見を伺いたくなるようなカリスマ性を備えていることが望 没交渉になるのではなく、時に応じて世間の人々にその存在を プマン・アンド・ホール社の原稿査読係としてギッシングに作 した時代であった。その中で、特にカーライル、そしてチャッ もできよう。このように十九世紀は言論界に多くの人材を輩出 家やウォルター・バジョットのような政治批評家を含めること 家の名前がすぐに想起される。また、マコーリーのような歴史 といった芸術分野での批評家、リー・ハント、ジョージ・ヘン アーノルド、カーライル、ミルなどといった広範囲にわたる言 の発言に謹聴した主要な人々を挙げてみると、ベンサム、 世 ろ、このような時期においては、快刀乱麻の発言で混沌とした 乱もなく、自由党と保守党が交互に政権を担当していたこの時 るかは時代の趨勢によって異なる。近隣諸国との間に大きな戦 的尊敬を集めることが必要であるが、何によってそれを確保す ましい。総じてこのような存在になるには、何よりもまず社会 で存在感を保たなければならない。後者の場合、まず隠遁生活 **論活動を繰り広げた人々だけでなく、ラスキンやペイターなど** 知らしめなければならない。そのためにも、折に触れて人々が が可能なだけの経済的基盤がなければならないが、全く社会と |相を切り捨てるような知識人が歓迎される。当時の人々がそ 軍人や政治家がカリスマになることは困難であった。 ・ルイス、レスリー・スティーヴンなどといった文芸批評 М • むし

ィスが彼に与えた影響について考えてみたい。品執筆上のアドバイスを与え、後には友人として遇したメレデ

手紙(一八九六年二月二十三日付け)でカーライルとメレディスギッシングは長年の友人であったエドゥアルト・ベルツへの

の両名に言及している。

先日、チェルシーにあるカーライル邸を訪れてみた。ひょった日、チェルシーにあるカーライル邸を訪れてみた。とれて名誉あるものとされているのを知ったら、大将、悪い気館になっているんだよ。実に興味深かった。それに、本人がどはしなかったんじゃないかな。

来週はもう一度メレディスに会いに行くつもりだ。

(Letters 6: 101)

にカーライルを紐解いている。三十一日には、この時代を振り返ろうとでもしているかのようまた十九世紀があと一年を残すのみとなった一八九九年十二月

少しこだわりを持っていたならどんなに良かっただろう。きっうは思わないかね? カーライルがあの哲学的現実主義にもう世紀が生んだもっとも重要な本の一つだと思うんだが、君はそ世紀 「衣装哲学」を読み返しているところだ。この本は十九

る本だよ。ある種、聖書みたいなものだね。 (Letters 7: 420)いただろうね。でも『衣装哲学』というのは永遠に読み継がれとカーライルの影響力はもっと深くて長続きするものになって

想の持ち主であったはずの彼ではあるが、一方でカーライルの 違いないが、何ゆえにカーライルの孤高な獅子吼に共感を寄せ ような柔軟な知性により親近感を抱いていたであろうことは間 ように思われる。幅広い教養を誇った彼は、本来ならばミル さだけで自己主張を通してしまうような人物にも惹かれてい あるということを彼は信じていた。本来ならば自由主義的な発 教育を受けても矯正されることのない劣った資質というものが も共有しており、大衆が教育を受けることの意義を説きつつも、 分かる。 少なくともある一定の評価を彼がこの書物に下していることが を「聖書」になぞらえるとき、盲目的な賞賛ではないにせよ、 教的には不可知論者だった彼が『衣装哲学』(一八三三~三四年) しつつも、どこか冷めた目で見ていることは明らかである。 このようにベルツに書き送るギッシングは、 ある意味では頑固な、理論の力よりも情熱と信念の カーライルに見られる民主主義への疑念をギッシング カーライルを尊敬 宗 る 強

分身)であることを考えても明らかなように、頭脳の明晰さは分身)であることを考えても明らかなように、頭脳の明晰さは、学校教師を務めた若き日のトマス・カーライル(図②)の中に、学校教師を務めた若き日のトマス・カーライル(図②)の中に、学校教師を務めた若き日のトマス・カーライル(図②)の中に、学校教師を務めた若き日のトマス・カーライル(図②)の中に、学校教師を務めた若き日のトマス・カーライル(図②)の中に、学校教師を務めた若き日のトマス・カーライル(図②)の中に、学校教師を務めた若き日のトマス・カーライル(図②)の中に、学校教師を務めた若き日のトマス・カーライル(図②)の中に、学校教師を務めた若き日のトマス・カーライル(図②)の中に、学校教師を務めた若き日のトマス・カーライル(図②)の中に、学校教師を務めた若き日のトマス・カーライル(図②)の中に、学校教師を務めた若き日のトマス・カーライル(図②)の中に、数学のの情報を失い、数学のの情報を失い、数学のの情報を失い、数学のの情報を失い、数学のの情報を失い、数学のの情報を失い、数学のの情報を失い、数学のの情報を失い、数学のの情報を失い、数学のの情報を失い、数学のの情報を表していました。



図② ジェイムズ・ホイッスラー『灰色と 黒のアレンジメント——カーライルの肖像 画』(1872~73年)

でエディンバラ大学に進んで数学と論理学を専攻したものの、

ズ・カーライルを父として一七九五年に生まれ、

十四歳の若さ

スコットランドの敬虔なピューリタンである石工ジェ

るのであろうか。

短期間務めたことを考えると、当時の生き惑う知的な若者の選し、ギッシングがアメリカで食い扶持を稼ぐために学校教師をドが高いことや非妥協的な点などもこの二人に共通しているって証明できると作者は考えていたようである。また、プライ論理学(数学の一分野である)で優秀な成績を収めることによ

る。 翌年にこの世を去った彼は、 ヴィクトリア朝も後期に差し掛かると切れ始めていたようであ おける文学界の先駆けを務めたことになるが、 ここにおいて彼の文壇での地位は不動のものとなった。ディ 方を確立することができ、ジェイン・ウェルシュとの結婚を一 択肢がいかに似通っていたか、驚くほどである。 ッシングが第一作 れになりかかった預言者」といったところだった。 九世紀後半におけるカーライルの位置づけは「いささか時代遅 ンズより少し早く登場したために、文字通りヴィクトリア朝に に完成を見る。それと前後して大著『フランス革命』(一八三 三年から『フレイザーズ・マガジン』に連載が始まり、 八二六年に果たした。一八三〇年に着手した『衣装哲学』は三 のイギリス文壇にヨーロッパの潮流を伝えることで自分の生き カーライルはその後、ドイツ文学の研究・翻訳を通して当時 アメリカの詩人エマソンとの交流などはあったものの、 が 出、 四一年には『英雄および英雄崇拝論』が公刊され、 『暁の労働者たち』(一八八〇年)を出版した ヴィクトリア朝前期の高揚感を象 彼の賞味期限は ちょうどギ 三八年 +ケ

徴する存在として見なされ、そのために後期になると、

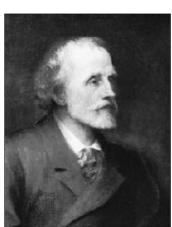
内面と

は時代の記念碑的存在として一定の敬意を払われており、そのける必然と理想の関係などといった問題に対して彼が提示したいると然となり、結果的に彼は同時代人によって超克されつつあとが多くなり、結果的に彼は同時代人によって超克されつつあ解釈や理論は、矛盾があるとかこじつけであると捉えられるこ解釈や理論は、矛盾があるといった問題に対して彼が提示した外面、ロマンティシズムとリアリズム、文学と社会、歴史にお外面、ロマンティシズムとリアリズム、文学と社会、歴史にお

存在感は薄れてはいなかったのである。

ことを望まなかった彼にとって、カーライルはその生き方の孤 ばかりではなく、仮に世間から見放されようとも、 憧れこそすれ、決して真似できる人物ではなかった。たとえば、 力がないことを知っていたギッシングにとって、 思いであったろう。ディケンズのように大衆に受け入れられる な頭脳の持ち主であった自分が、 親しみをこめている点に注目したい。 を「大将(the old fellow)」と呼び、まるで旧友に対するような フェンを描きながら、自分にはそれだけの信念を貫き通す精神 った。しかし、結婚もせず、 されている点において、良きロール・モデルたり得たはずであ 高さと、 ができなかったことに対して、ギッシング自身は内心忸怩たる を貫き通そうとする強さであろう。 ギッシングがこの人物に見ていたのは、 世間から尊敬されつつも、 ひたすら芸術活動に打ち込むビッ 彼のような筋の通った生き方 彼自身、 種独特の距離のとり方を カーライルと同様に明晰 カーライルのこと 記のような共通点 カーライルは 自分の信念

呼んでも差し支えない父親を持ちながら、結果的に文壇の大御 スには共通項があることが分かる。彼らはまた、労働者階級と ドイツの知的遺産から受けた影響など、カーライルとメレディ のドイツ思想界の影響を受けた。このあたり、十九世紀前半の 十四歳の時にドイツのモラヴィア派の学校へ行き、そこで当時 になるこの作家は、ウェールズ地方出身の仕立て屋を父に持ち、 ジ・F・ワッツ 『ジョ メレ ディス』(1893年)



ージ・

う。 結婚生活が破綻し、後に再婚した相手にも先に逝かれるなど、 クの娘で彼よりも十歳年上の未亡人メアリ・アン・ニコルズ)との かれるところがあったかも知れない。 やはり結婚生活に影が差していたことも、ギッシングには心惹 所となり、尊敬を集める身分になった点でも似ていると言えよ また、 メレディスが最初の妻(作家トマス・ラヴ・ピーコッ

のための助言をし、小説家としての評価も高かったジョージ・

がいる。ギッシングよりも三十歳ほど年上

メレディス (図③)

彼には欠けており、それが彼の二度の結婚生活を不幸なものに

知的な妻を求めて長い求婚期間を堪えるだけの性的な忍耐力が

したことは、他でもない彼が一番よく分かっていたのである。

ギッシングにとって、より模倣しやすい先達を挙げるとすれ 彼の文才を見抜き、『無階級の人々』(一八八四年)の出版

費出版した詩集『谷間の恋』の作者として登場したときには清 さが存在していたわけではない。そもそも彼は一八五 は、 リストとして定期的に雑誌に寄稿するなど、明快な文章を書か 作家として本格的に小説を発表するようになるまではジャーナ 新な作風をロセッティやテニスンによって賞賛されていたし、 理解されなかったと言われるが、 ッチ日報』や『モーニング・ポスト』といった保守党系の新聞 たにもかかわらず、ただ生計を立てるために彼は『イプスウィ 用意されていなかった。したがって、 ブラウニング、テニスンが君臨する当時の文壇に彼の居場所は してはディケンズ、サッカレー、C・ブロンテ、詩人としては っていた」十九世紀半ばだったということであろう。 衰退期でもない、ヴィクトリア朝が一時代として最も ざるを得ない立場にいたのである。彼にとって運が悪かったの ィクトリア朝の黎明期でもなければギッシングのように時代の メレディスは特に後期作品の難解な文体ゆえに一般読者には 創作活動を始めたのがカーライルやディケンズのようにヴ 最初から彼の特徴をなす晦渋 思想的には急進的であ 小説家と 「脂が乗

く。このように、転んでもただでは起きないところがメレディ(一八五九年)や詩集『近代の恋』(一八六二年)を出して気を吐婚生活の破綻を題材にした『リチャード・フェヴェレルの試練』た。ジャーナリストとして一八六六年まで働く一方、自らの結れた雑誌と関係し、他の雑誌にも定期的に投稿するようになっ

スのしたたかさである。

れたことであった。

社で記者を勤めたり、『週に一度』(一八五九~七四年)

と題さ

ことが教養人の必須条件であるかのような、 この頃までには彼の文体があまりに凝ったものになったために 三十九歳の時にサリー州ボックス・ヒルのフリント・コテージ プマン・アンド・ホール社の編集顧問として勤め始めたメレデ るものである、という再認識を促すきっかけを作ることになる。 などによって万人が教育を受けられるようになったこの時期 (一八七七年) によって当時の知的読者を満足させ、義務教育化 西洋古典の知識を存分に発揮した講演内容を収めた『喜劇論』 た代表作によって文壇に不動の地位を確保するに至る。また、 の生涯』(一八七四年)、『エゴイスト』(一八七九年) などといっ てからは半ば隠者のようにして過ごした。やがて『ビーチャム に定住し、終生をそこで、特に二度目の妻が八五年に亡くなっ ィスは、ようやく生活に安定が兆した六四年に再婚し、六七年、 八六一年からはジョン・フォースターの後をついでチャッ 真の教養はやはり古典語を読みこなせる者にのみ享受でき 読者がついていけなくなる一方、 メレディスを読みこなす いわば試金石の一

書館の副館長に任命され、一九○五年にメリット勲位を贈呈さ芸協会の会長に就任したこと、さらに一九○二年にロンドン図学から名誉博士号を授与され、逝去したテニスンの後、英国文学から名誉博士号を授与され、逝去したテニスンの後、英国文学から名誉博士号を授与され、逝去したテニスンの後、英国文でから名誉博士号を授与され、逝去したテニスンの後、英国文学から名誉博士号を授与され、近去に及んで押しも押されつになっていた。一八九五年の『驚くべき結婚』を最後にメレつになっていた。一八九五年の『驚くべき結婚』を最後にメレ

その作品を正しく評価できた者がほとんどいないにもかかわるず、ヴィクトリア朝の掉尾を飾るべき人物としてメレディスらず、ヴィクトリア朝の掉尾を飾るべき人物としてメレディスは自の世界にこだわり続け、その真価とは別に、その難解さによってのみ稀有な芸術家と位置づけられ、神棚に祭り上げられるような待遇を彼は受ける必要があったのである。メレディスはような待遇を彼は受ける必要があったのである。メレディスはような待遇を彼は受ける必要があったのである。メレディスはになってのみ稀有な芸術家と位置づけられ、神棚に祭り上げられる。 「偉大なヴィクトリア朝」の生んだ「偉大な芸術家」という記になってのの中に描き出した(彼には不可能な)真の芸術家という記述が、本人にはアールである。

どは、田園に居を定めたメレディスに倣った部分もあろう。ま年、以下『私記』と略記)において繰り返し書く自然への愛着なギッシングが『ヘンリー・ライクロフトの私記』(一九〇三

後に考えてみたい。

後に考えてみたい。

後に考えてみたい。

後に考えてみたい。

後に考えてみたい。

の著作に本格的に取り組むことがなくなったが、ギッシングは時代のイコンとして消費され、超克され、そしてもはや誰もそれと同じ預言者のごとき孤高さが見て取れる。ただ、彼らは一様困や差別などを告発するときの激しさには、カーライルのそれと同じ預言者のごとき孤高さが見て取れる。ただ、彼らは一様困や差別などを告発するときの激しさに見た、人間性を抑圧する

## 第四節 教養主義の終焉

陶冶し、 界において占めていた「教養主義」時代のことである。そこでを育成する場としての旧制高等学校が特異な位置を日本の教育 きたいのは、 としての矜持を胸に「末は博士か大臣か」という青雲の志を持 は都会出身者と地方出身者が共同生活を送りつつ、 時期は日本にもあった。大正から昭和初期に至る、 改良に参画するような人物となることが理想と見なされていた ていたとされる。 見すると田園で花鳥風月を愛でる風流人の余滴のように見え ギッシングが辿ってきたような、教育によって自らの人格を 『私記』が収録されていることが多かったという事実である。 その社会的地位を少しでも上方修正し、 彼らの英語教科書にはギッシングの作品、 それの真偽はともかく、ここで注目してお ひいては社会 有為の人材 選ばれた者 とりわ

に遊べたのである。

る、 つ作品世界に没入するとき、 養の証である古典の書物を紐解き、 彼のエロスの対象としていたのである。 単なる蔵書癖などではなく、多幸感をもたらしてくれる麻薬の 記 子を揶揄してはいるが、彼自身は書物への愛着を繰り返し もこの作品に特徴的なのは繰り返し語られる書物への偏愛であ 側に作者が捨ててきた都会生活への愛憎、 きも貧しきときも」書物こそが彼の伴侶だったのだ。 慰撫されることの多かったはずのギッシングは、 ないが、恐らく自らも書物を撫でさすることによって精神的に なフェティシズムが何に由来するのかは推測することしかでき ようなものとして書物が捉えられていることである。 る。ギッシングは『蜘蛛の巣の家』(一九〇四年) の嫌悪を滲ませていることは一読して明らかであるが、 「ハンプルビー」などで書物に淫する人物が家族を巻きこむ様 で表明していた。注意すべきは、ここに描かれているのが v かにも日本人の感性に馴染みそうなこの作品が、 彼はこの世の憂さを忘れて別天地 そのインクの匂いを嗅ぎつ 文字通り、「 イギリス帝 v 所収の短篇 わば書物を このよう 自らの教 富めると 国主義へ その 何より

少なくとも青春期特有の葛藤に由来する、真剣な願望に基づい物になりたいと願った彼らの向上心 (見栄も含まれていよう) は、かどうかは別として、そういった錚々たる古典を鑑賞できる人を小脇に抱えて歩いたことをわれわれは笑えない。理解できる旧制高校生が、お守りのようにゲーテやショーペンハウアー

出そうともがいた挙げ句に全てを失った彼の体内に埋め込まれ だったからである。それは、自分の本来いるべき場所から抜け 理想を追求しつつ、あと一歩のところでそれをみすみす逃して が、それが自分に可能であると信じていたかどうかは疑わしい。 た強制反復装置のようなものであって、壊れた音楽再生装置の しまう、まるで受難者のような生き方を選び取るのが彼の性癖 ていたと考えられるからである。ギッシングもまた、 より上質の人間になりたいと願っていたことは間違いない 同じメロディを奏で続けることになるのだ。 教養のあ

を交わしながらやり過ごした青春時代に繋がるからであろう。 ら れるとすれば、 か 理念だけが過去の遺物として語り継がれるようになるのかも知 け継がれた。その教養主義もいよいよ息の根を止められ、 念だけは日本の旧制高校生、あるいはその後の団塊の世代に受 落していくが、ギッシングが 津に居を構えて千本松原の自然保護に力を入れたように、 はまだ見ぬものへの憧れを人は失い、 教養主義は教育そのものが大衆化していく中で陳腐化し、 であり続けた。 ギッシングはそれを最後まで拒否することで、 分かりもしない本のページを繰ったり、 が「寂しさ」を抱えて日本各地を漂泊したのちに、 しかし、まさしく教養主義時代の人であった若山牧水 それは居場所を持たないような不安や焦燥に駆 われわれが今日なお彼の 『私記』の中に残した書物への執 日常の中に回収されて 背伸びした議論 『私記』に惹か 終生「旅 いつ その 沼 没



27歳の若山牧水 (大正元年撮影)  $\mathbb{Z}(4)$ 

#### 註

- (1) Geoffrey Best, Mid-Victorian Britain, 1851-75 (London: Fontana.
- (21) Walter E. Houghton, *The Victorian Frame of Mind*, 1830-1870 (New 1852-1910 (Harlow, Longman, 1986) などはその代表例である 1979); Bernard Denvir, The Late Victorians: Art, Design and Society
- (3)ディケンズの場合は、片思いの女性であるマライア・ビードネ Haven, CT: Yale UP, 1957) xvi ルとの経済・階級格差を埋めるための方便の一つであったが、 シングの場合は、 帰国後、 文筆で身を立てようと決心したから

ギ

(5) ハロルド・ビッフェンの作品は、このような彼の理想を具現し the Mass Reading Public, 1800-1900 (Athens: Ohio UP, 1998) を参照 Richard D. Altick, The English Common Reader: A Social History of

4

「教養主義者」の先達であったことは確かである。

た。 た作品だったのであろうが、やはり読者には受け入れられなかっ

- (Φ) John Forster, The Life of Charles Dickens, 2 vols. (London: Dent 1980) 1: 21
- 博士など。 イヴィッド・コパフィールド』(一八四九~五〇年)のストロング(7)『ドンビー父子』(一八四六~四八年)のブリンバー博士、『デ
- ( $\infty$ ) Pam Morris, Dickens's Class Consciousness: A Marginal View (Houndsmill: Macmillan, 1991) 1-2.

(9) 正確には、ゴドウィンの弟が自分たちと兄との違いを指摘する

ために用いた言葉である。

うか。いずれにせよ、ギッシングがここで取り上げられているい手であった世代が表舞台から去っていきつつあるからでもあろい手であった世代が表舞台から去っていきつつあるからでもあろ『グロテスクな教養』(ちくま新書、二○○五年)など、教養、教養主義を巡る著作がここ数年出ているのは、教養主義の最後の担養主義を巡る著作がここ数年出ているのは、教養主義の最後の担償が、「一人の主義の、「一人の主義の、「一人の主義の、「一人の主義の、「一人の主義の、「一人の主義の、「一人の主義の、「一人の主義の、「一人の主義の 「一人の主義の、「一人の主義の 「一人の主義の、「一人の、これ、「しきない、これ、「しきない、これ、「しない、これ、これ、「しない、これ、これ、「しない、これ、これ、「しない、これ、

文学としての短歌を多く残した。 創作社を興す。旅と酒を愛し、日本各地を旅して回り、自然主義新聞社に勤務するも退社、その後、詩歌雑誌『創作』を刊行する新聞社に勤務するも退社、その後、詩歌雑誌『創作』を刊行する